

# 近現代哲学の虚軸としてのスピノザ

April 2010 ~ March 2013

Baruch de  
Spinoza  
1632-1677

科研基盤研究(B)  
近現代哲学の虚  
軸としてのスピ  
ノザ

虚  
ス  
ピ



スピノザ、この厄介なもの

## The Intractable Spinoza

11月24日(土)

第10回研究会「カントにおけるスピノザ問題」

11月25日(日)

総括シンポジウム「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」

2012年11月24日(土)

14:30~17:30

大阪大学豊中キャンパス

大阪大学待兼山会館2階 会議室

福谷茂(京都大学)

「カントにおけるスピノザ問題」

—カント・スピノザ・第2スコラ哲学—

(コメンテーター) 加藤泰史(一橋大学)

(司会) 栗原隆(新潟大学)

(終了後懇親会)

2012年11月25日(日)

13:00~18:00

大阪大学豊中キャンパス

大阪大学文学部2階 大会議室

イントロダクション「スピノザあるいは石像の招待」

上野修(大阪大学)

第一部：虚軸としてのスピノザ、十七世紀と現代

ライブニッツ=スピノザ問題の射程…

現代哲学思想とスピノザの影…

松田毅(神戸大学) + 鈴木泉(東京大学) + 須藤訓任

(大阪大学) + 高木久夫(明治学院大学) + [合田正

人(明治大学)] (司会) 上野修(大阪大学)

第二部：虚軸としてのスピノザ、ドイツ観念論

汎神論論争とその後…

栗原隆(新潟大学) + 入江幸男(大阪大学) + 加藤泰史

(一橋大学) (司会) 上野修(大阪大学)

キャンパスマップ

[http://www.osaka-u.ac.jp/ja/  
access/toyonaka.html](http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/toyonaka.html)

連絡先

[quietnon@let.osaka-u.ac.jp](mailto:quietnon@let.osaka-u.ac.jp)

(大阪大学上野研究室)

Baruch de Spinoza  
1632-1677科研基盤研究(B)  
近現代哲学における虚  
軸としてのスピノザ

# 11月24日(土)

## 第10回研究会「カントにおけるスピノザ問題」

### カントにおけるスピノザ問題

#### カント・スピノザ・第2スコラ哲学

福谷 茂 (京都大学)

カントとスピノザとの関係を考えるときにとりうる方法はいくつかあるだろう。まず考えられるのはカントの公刊著作からレフレクシオーネンやOpus postumumにいたるまでのスピノザ言及箇所を収集・記述するという文献学的方法である。この点に関してはGiuseppe De Flaviis, Kant e Spinoza, 1986がすでに成果を挙げている。それをドイツにおけるスピノザ受容という観点から捉えるためには、たとえばPaul Vernière, Spinoza et la pensée française avant la révolution, 1954のような業績と対照することが必要となろう。私自身もOpus postumumにおけるカントのスピノザ観の一変という観点から論じたことがある。しかしこれを踏まえて今回試みたいのは、大局的に見てカントとスピノザの間にどのような関係が成立しているか、という点に新しい照明を当てることである。カントとスピノザの間に第2スコラ哲学という共通した背景をおくことでこの問題を考えることができるというのが見通しである。

スピノザと第2スコラ哲学との関係を論じた先行業績としてPiero di Vonaの「半世紀にわたる一連の仕事がある」[Studi sull'ontologia di Spinoza (1960, 1969), Studi sull'ontologia di controriforma (1968), Spinoza e i concetti trascendenti (1977), I concetti trascendenti in Sebastian Izquierdo e nella Scolastica del Seicento (1994), L'ontologia dimenticata (2009)]。Di Vonaの発掘した豊富な知見のうち今回取り上げたいのは、超範疇transcendentiaをめぐる論点である。周知のように超範疇はカテゴリーとの対比において語られるものであり、カテゴリーが存在者を諸領域へとへと分類するものであるのに対して、超範疇は全ての存在者にあまねく

適用される概念だとされる。従来は中世哲学上の概念とされてきたが、実際には対抗宗教改革期の第2スコラの展開において超範疇は存在論の主要なテーマとなっていった。これは存在論が自然学との対抗上、独自の対象を確保する必要があったことに基づいているが、中世の超範疇のように神の創造に基礎を置いているのではなく、近世の超範疇は神もまた下位区分の一つとするまったく自律的な存在論という新しい学問の象徴である。Di Vonaはスピノザこそこの存在論の構想の完成だと見ている。

カテゴリー論を中心とする従来の形而上学から超範疇論を中心とする近世の存在論への移行という点においてカントのスピノザとの関係を見ることができると考えられる。すなわち、『純粹理性批判』においてカテゴリー論は演繹論から原則論へと展開され、弁証論もまたカテゴリーを枠組みとして叙述されている。これに対して感性論の立脚点はまったく異なったものである。この相違を感性論を超範疇論に対応させて考えることで解明を試みたい。カントがスピノザを意識する場合の媒介項は空間であるが、超範疇論に対応するものとしての超越論的感性論を考えることで、感性論と演繹論以下との関係付けという問題を、超範疇論とカテゴリー論との連関として、つまり近世の形而上学の背負った課題として考える可能性をさぐりたい。これは同時にカントがスピノザとアリストテレスをどう関係させ、どう受け入れたか、という問題でもある。

Baruch de Spinoza  
1632-1677科研基盤研究(B)  
近現代哲学における虚  
軸としてのスピノザ

# 11月25日(日)

## 総括シンポジウム

### 「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」

イントロダクション

「スピノザあるいは石像の招待」

上野修(大阪大学)

「神即自然」の哲学者スピノザ(1632-1677)の登場はヨーロッパを震撼させ、その名はひとつの蹟きとなった。われわれの共同研究「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」(平成22~24年度科研基盤研究(B))はスピノザがその後ずっとトラウマ的な作用を近現代哲学の形成に及ぼしてきたのではないかと考えてきた。このシンポジウムはその成果を問うものである。以下、宛先として当科研メンバーの名前に言及しながら、問題への導入を試みたい。

登場する哲学思想は多岐にわたるので、ここはひとつのたとえによって事柄の全体的なイメージを提示しておきたい。モリエールの「ドン・ジュアンあるいは石像の宴」である。死せる騎士長の石像は、ドン・ジュアンの不用意な招きに応じて本当に宴にやって来る。そして恐るべき石像の宴へと、今度は彼を招待する。まさにそのような石像としてスピノザは哲学者たちの宴にやって来る。『全体性と主体性』の著者、Jean-Marie Vaysseの見事な一節を引いておこう。「スピノザはまるで騎士長の石像のごとくにカントの前に立ちほだかり、超越論的観念論を石像の宴へと招待する。そこで絶対者は死せる実体という石化された形であられるのである」(p. 10)。合理主義を標榜する啓蒙主義は必ずや、絶対者を死せる実体として招き寄せることになるであろう。ヤコービによるこの警告は啓蒙主義の楽天性を打ち砕き、カントの批判哲学の体系問題を露呈させ、ドイツ観念論へと道を開く(栗原)。フィヒテやシェリングが、そしてヘーゲルが、カントの超越論哲学を超え出てゆくためには、どうしてもスピノザの全体的存在論を招き入れることが必要であった(入江)。結局、現実の唯一性を超越論哲学はどう考えることができるのか。晩年のカントもまたこの問いに立ち返り、スピノザの招待を受けた可能性がある(加藤)。スピノザを招き入れながら、しかも死せる実体が出現する石像の宴への誘いをいかに回避するか。近現代哲学の繰り返す強迫のごとき問題がここにある。

こうした石像の招待の、いわば仲介者としてライプニッツがいる。ライプニッツはスピノザの魅力と危険を深刻に受け止めた唯一の同時代人であると言ってよい(松田、鈴木)。ライプニッツはスピノザに崖っぷちを見た。その崖っぷちはドイツ観念論においても繰り返し姿を現すそれとおそらく同じ深淵である。ライプニッツはこれを回避すべく、スピノザの体系に匹敵する独自の体系を創出しようとしていた。近現代哲学のスピノザ受容においてライプニッツの哲学が果たしてきた「信管除去」という役割は無視できない。

現代においてもレヴィナスのスピノザに対する忌避がある。ライプニッツの場合がそうであったように、それは非常にアンビバレントな拒絶である(合田)。同じようなアンビバレンスはニーチェにも見ることができのかもしれない。ニーチェが運命と生の哲学を標榜するかぎり、現実と必然が一つにつぶれるスピノザの石化された絶対実体への招待は大きな問題であったはずである(須藤)。レヴィナスの場合、ことさら問題を難しくしているのは、スピノザがユダヤ人であることを棄却したおそらく最初のユダヤ人哲学者だったからである。石化した「死せる実体」はいわゆるキリスト教的西洋を脅かすだけではない。人間化され弁証法化されたキリスト教的な三位一体から距離を置くユダヤ的な神を、スピノザは本当に裏切ったのか。それはいまだに開かれた問いであり続けている(高木)。スピノザはだれにとっても問題だが、彼自身は自分の哲学とともに平安であった。そのこと自体があらためて問われることになるだろう。

こんなふうに、スピノザは近現代哲学の虚軸として存在する。この総括シンポジウムはしたがって、二つのセッションによって構成される。第一部「虚軸としてのスピノザ、十七世紀と現代」は、とりわけライプニッツのスピノザ問題に的を絞る、それが現代の哲学にも影を落としている可能性を探る。続く第二部「虚軸としてのスピノザ、ドイツ観念論」は、カント以降の知的地平を規定し続けている隠れた因子としてのスピノザについて討議する。そののち、全体討議に臨む。

Baruch de Spinoza  
1632-1677

科研基盤研究(B)  
近現代哲学における虚  
軸としてのスピノザ

## ライブニッツ・スピノザ関係再考 ——世界の不透明性をめぐって——

松田毅 (神戸大学)

少なくとも、まともなライブニッツ哲学の研究者ならば、一七世紀の形而上学の偉大な先達であり、そのライバルでもあった、スピノザの圧倒的存在感を無視できないに違いない。この科研の共同研究に登場する偉大な哲学者たちの中で(デン・ハーフで)スピノザの肉声を聞いたのは、確かにライブニッツだけである。提題者もいささか跛行的ではあったが、ライブニッツの側から『エチカ』『知性改善論』書簡集に見られる「自由」、「心」、「因果」、「無限」と「個体」そして『神学・政治論』の聖書解釈、さらに自然主義の形而上学と「可能世界」の問題などに即して、両者の形而上学の複雑な関係に分け入ろうと試みてきた。そしてそのような考察は、狭義のライブニッツ研究にも幾つかの光を投げかけるものであったと思う。このシンポジウムでは、提題者のこれまでの考察を整理しつつ、あらためてスピノザとライブニッツの哲学的関係について考えてみたい。

その考察の手掛かりのひとつとして、最近公刊されたばかりの上野修氏の論考「スピノザとライブニッツ 世界の不透明性について」を取り上げる。問題は、そこでライブニッツがスピノザの形而上学に「奇怪さ」を見た点に触れ、上野が「それは意味性の消失にある。ライブニッツが崖っぷちの向こうに見たのはおそらくこの根源的な無意味という深淵ではなかったかと私は思う」(213頁)と述べていることである。この「無意味」は『弁神論』173節の「盲目的必然」の言い換えであり、ライブニッツはスピノザによる「パースペクティブの消失」を恐怖したされる。提題者も上野の指摘は事柄の真相に迫る鋭さをもつと考える。しかし、提題者には、事実真理の根拠づけに顕著に現れる「世界の不透明性」と呼ばれるものは、ライブニッツには必ずしも否定的な事態ではなかったと思われる。この点を事実真理と現実世界の認識の問題から論じることがこの提題の課題となる。

### 西洋近代思想の裏潮流の源泉

としてのスピノザ

須藤訓任 (大阪大学)

思想家や哲学者が古典に列せられる場合、その条件とはいかなるものであろうか。それまで

のさまざまな思潮が合流しながら、破綻をきたさずに一つの有機的に統合された思想体系をなすことであろうか。それとも当代および／あるいは後代の人びとへの多大な影響力の有無によるのであろうか。そして、その影響力のゆえに歴史的に重要な意義をもつ事件や出来事を招来するか否かによるのであろうか。さらにまた、時代や地域によって多少の程度差はあろうとも、一貫して研究対象とされ続け、たとえ一時的に同時代人の視野から見失われたかに見えても、再評価されて復権する、そういう意味で長期にわたってその思想としての価値が安定的に認定されることであろうか。

以上のような基準や条件をすべてないし一部満たす古典的「哲学」というものは確かに存在するだろうし、われわれのテーマであるスピノザにもそうした側面が認められておかしくないだろう。しかしここでは、いまひとつの性格に着目したい。それは、それまで見られなかった新たな、あるいは少なくともそれまではあまりはつきり見えていなかった思想的潮流の発信地という性格のことである。これまた「古典」としての身分を思想に与える一要件となりうるだろう。そして、スピノザもまたこの要件を充足していると思われる。ただし、それは西洋哲学史において「正統派」思想というよりは、むしろ裏潮流と呼ばれるべき思潮である。とくにその「自由」に関する思想は注目されてよい。「自己の本性の必然性のみによって存在し・自己自身によってのみ行動に決定されるものは自由であると言われる。」(『エチカ』第一部定義7、畠中訳)

近代自然科学の勃興以降、西洋の思想家たちはその機械論的な全面的決定論との対決を迫られ、人間の自由の可能性の確保に追われた。そうした状況下、スピノザは決定論と自由の両立どころか、「必然性のみ」によって自由は成立するという驚くべき逆説的思想を打ち立てた。そしてこの「自由=必然性」の思想は、比較的目立たないながら、その後の西洋思想史において連綿と受け継がれていったように思われる。後継者の代表的哲学者は、私見によれば、ショーペンハウアーとニーチェである。前者は「物自体と現象」というカント哲学の枠組みに則りながら、因果関係によって全面的徹底的に支配される現象界の「私」が同時に物自体の叡智的存在として厳密に自由であるとし、後者は偶然と一致する必然性の世界を肯定する「運命愛」の境地として人間の自由を謳い上げた。

Baruch de Spinoza  
1632-1677科研基盤研究(B)  
近現代哲学における虚  
軸としてのスピノザ

中世の葛藤と近代の偏見  
——ユダヤ思想におけるスピノザ受容——  
高木久夫 (明治学院大学)

ユダヤ思想のスピノザ受容は、ドイツやフランスのそれと異なり、哲学的スピノザ像に一時期を画すものを産みだしていない。にもかかわらず無視しがたいのはなぜだろうか。

近現代の「ユダヤ思想家」は、しばしば不可避の務めのようにスピノザを非難する。言うまでもなくスピノザは、思想的にユダヤの出自であるにもかかわらず、ユダヤ教とユダヤ哲学を陰に陽に否定した。このため受容側の踏み絵となり、スピノザの定位は「ユダヤ思想とは何か」という自己定義に直結する課題となる。だが同時に彼らのスピノザ批判の多くは表面的でテキストの緻密な議論を欠いたものとなり、しばしば顔面どおりの拒絶と断ずることをためらわせる。

彼らはスピノザ批判の背後に、つねに弁証すべきユダヤの伝統を見すえた。スピノザへの非難はある程度まで、彼らの伝統に西欧近代が(キリスト教的所与への自覚を欠いたまま)向けた偏見への抗弁であった。一方スピノザは17世紀のラテン語読者の偏見を利用し、啓示宗教一般への批判を、もっぱら過去のユダヤ思想の貶めに仕込んでいた。偏見にみちた読者を前に互いをスケープゴートとするこの気鬱な力学が、双方のことに固有の偏曲をうかがわせるのである。

この意味で、ことはスピノザ以前のユダヤ思想の伝統にかかわり、留意すべき指標はマイモニデスである。『神学政治論』のマイモニデス(およびアルファカール)批判は、ある部分虚構であり、まったく一面的である。宗教の社会的機能を承認する「信仰と哲学の分離」という彼の着想は、むしろ『迷える者らの手引き』以来の伝統に多くを負う。このためスピノザ批判は、一歩あやまればマイモニデス批判に転ずる性格をもつ。スピノザの「裏切り」が、ほぼつねに聖書とタルムード(さらにはユダヤ民族そのもの)をよりどころに告発される一因はここにあると言えるだろう。あるいは宗教的・倫理的動機に発するとしても、一元論や必然主義の否認は、中世ユダヤ哲学のいくつかの高みまで崩しかねない。マイモニデスに触れた例外、シュトラウスが、『手引き』に(それどころか『クザーリ』にまで)隠微な宗教批判を読み込み、スピノザの側に置く含意は軽視できない。

(スピノザを積極的に評価するユダヤ系の思想家たちの信仰とのかかわりも、この点で唆

に富む。カール・レーヴィットやアイザック・ドイッチャーは、ユダヤ教の伝統から自覚的に訣別した。ダヴィッド・ベングリオンをはじめとする政治的シオニストのスピノザびいきも、イディッシュ左翼の伝統をひき、正統派との抜きがたい葛藤を反映する。現代イスラエル国家の世俗性をめぐる論争が、スピノザの“Theocrazia”概念を回帰すべき争点としたのも、興味ぶかい事例と言えるだろう。)

ユダヤ思想のスピノザ受容が無視しがたい印象を与えるのは、平たくはそれが彼の思想的来歴にかかわるためである。ただし受容者のスピノザ像が、ユダヤの倫理的人間観・神観の棄却という単調な図式に止まるなら、「信仰と理性の分離」という処方を示したスピノザの理解に、どれほど資するところがあるだろうか。この単純な図式の向こう側には、中世ユダヤ思想がはらんだ啓示との緊張と、西欧近代による普遍性の標榜が潜む。これらのパラメータがもたらす議論の屈折は、ユダヤ思想のスピノザ受容が帯びる無視しがたさを解明するさいに、念頭に置くべきものかもしれない。

合田正人 (明治大学)

スピノザがアムステルダムのポルトガル人共同体から破門されたのは1656年のことだった。それから300年にあたる1956年をめざして、新生イスラエル共和国では、初代首相のベン・グリオンを中心として、スピノザの破門を解こうとする世界的規模の運動が展開された。その時の熱狂的な雰囲気について、近々私は、エルサレム・ヘブライ大学の名誉教授ポール＝メンデス・フロール氏から直に話を聞くことができたが、その際、スピノザがユダヤ人に対して赦し得ない「裏切り」を犯したとして復権に反対した人物の一人が、ほかでもないレヴィナスだった。レヴィナスはまた、そこには「スピノザの裏切り」という表現が用いられているのだが、同じく『全体性と無限』第一部末尾にも、「思考と自由は分離と(他者)への顧慮からわれわれに訪れる——この主調はスピノザ主義の対極に(aux antipodes du spinozisme)位置している」(TI, p. 108)と明言されている。

1961年以降、レヴィナスは conatus essendi, fruitio essendi といったキーワードを援用し始めた。これらはスピノザの『エチカ』や『書簡』の言葉を意識的に合成したものである。Conatus については、例えば『エチカ』第四部定理22の証明に、「自己保存の努力は徳の唯一で第一の基礎で

Baruch de Spinoza  
1632-1677

科研基盤研究(B)  
近現代哲学における虚  
軸としてのスピノザ

ある」とある。Essendi に関しては、『エチカ』第一部定理24の証明に、「あるいは(スコラ学派の用語を使えば)神は物の在ることの原因でもある」とある。Fruitio essendi については、ロデウエイク・マイエル宛の書簡12のうちにこの表現が見出される。

もちろん、レヴィナスは conatus essendi の揺ぎない「自然性」を転覆しようとしているのだが、このようにレヴィナスのスピノザへの対応は表面的にはアンチ・スピノザで一貫しているように見える。レヴィナスがタルムードをユダヤ教の本質とみなすのも、ラビ的解釈を聖書の原義の妄想的歪曲としたスピノザの『神学政治論』に対抗してのことだったと考えられるだろう。しかし、果たして事態はそれほど単純なのだろうか。「スピノザ主義」とは、その「対極」とは何だろうか。「裏切り」(trahison)とは。「締め出されたもの(forclus)はより強くドアを叩く」(P・クロソウスキーと言われるように、スピノザはレヴィナスのテキストをどのように叩いているのだろうか。これが私の

基本的な問いである。この点に関してはレヴィナス自身、先の『全体性と無限』からの引用文に、あるいはある操作を施していたかもしれない。なぜなら、この一節は、ベルクソンが若きジャン・ケレヴィッチに宛てた1928年7月7日の書簡との類似を私に感じさせるからだ。「私はあなたの著作〔『ベルクソン』〕の特にスピノザに関する箇所注目しました。多分すでに申し上げたと思いますが、私は『エチカ』を読み返すたびにいつも我が家に(chez soi)いるように感じます。そして、そのたびに驚くのです。私の主張のほとんどはスピノチズムの対極に(à l'opposé du spinozisme)いるように見える(私の思考のなかでは実際にそうである)からです。」レヴィナスも「スピノザ主義の対極で」「我が家にいる」と感じたのだろうか。また、ウルフソンのスピノザ論について1937年に書かれた書評の次の一節は、レヴィナス自身の来るべき対応を自己言及的に内包しているとも考えられる。「哲学者たちは歴史上もつとも中傷誹謗された者たちである。後世の人々は、おそらくは彼らが抱いていなかった意図を、彼らの心を掠めさえしなかった悪意を彼らに帰する。しかしながら、哲学が生きたものであるのは、それが誹謗中傷にきっかけを与える限りにおいてでしかない。」(『レヴィナス・コレクション』ちくま学芸文庫、188頁)因みに、この書評のみならず、1930年代の「マイモニデスのアクチュアリテ」「逃走に

ついて」においてすでにスピノザとの暗黙の戦いが始まっていたと考えられる。

このような観点から私が初めて両者の比較を試みたのは今から13年前のことで、その時の推論から二つの箇所を挙げておきたい。

1:ひとつは、「スピノザが思考の様態(mode)とみなすものは現象学的には顔(visage)として記述される」(『神・死・時間』というレヴィナスの発言をきっかけとした考えである。「(無限者)を表出しつつ自己表出する、そのような「顔」によって個体化される(私)を、応答という表出によって自己表出しつつ、「顔」、ひいては(無限者)を表出し、(無限者)に仕えるところの「様態」とみなすことができるのではないか。ひと言で言うなら、「実体」→「属性」→「様態」の連関が、「無限者」(彼・自己)←「顔」←「自我」というかたちでレヴィナスのいつにも存在しているのである。)(『レヴィナスを読む』ちくま学芸文庫、327頁)

2:いまひとつは釈義に関してで、ユダヤ教の普遍救済/特殊救済、選民の観念、タルムードをめぐる見解の相違にもかかわらず、「レヴィナスは「慈愛」と「正義」の教えを聖書から引き出したことそれ自体を批判していない。それどころか彼は、「スピノザの天才は聖書の倫理的意味の還元不能性を認めた」と賛辞を送ってさえいるのだが、事実、「聖書の教えるところによれば、全律法は隣人を愛することという一点にかかっている」という『神学・政治論』の見地は、レヴィナス自身の見地でもあったろう。」(同上、329頁)

1と2を結び問題として、私は「翻訳」(traduction)を挙げるができると思っている。この点ではレヴィナス自身、「翻訳」と「裏切り」(trahison)を結びつつ、「それを代価としてすべてが、語り得ないものさえが現出するような裏切り、それによって、語り得ないものに関する無謀な漏洩が可能になるところの裏切り、それは哲学の課題そのものである」と、『存在するとは別の仕方』で言っている。アドルノが『ヘーゲル三研究』でウイトゲンシュタインについて述べた言葉と酷似した一節であり、このような言葉がレヴィナス自身によって発せられている限り、スピノザの「裏切り」を単なる非難として受け止めるわけにはいかないだろう。

Baruch de Spinoza  
1632-1677科研基盤研究(B)  
近現代哲学における虚  
軸としてのスピノザスピノザにおける無限性と  
ヘーゲルにおける自己関係性  
栗原 隆 (新潟大学)

ヘーゲルがスピノザに触発されたと思われる論点、たとえば、「自己原因」であったり、「外面的な論証」をとらず「展開」によって体系を構成しようとした方法論であれ、「規定的な否定」はもちろん、「自己関係」でさえも、ヤコービを経由したものであったことを明らかにしたい。

ヘーゲルは、スピノザ哲学の「実体」を「主体」として理解することを通して、「自己原因」そして「規定的否定」さらには「自己関係」という発想を、自らの「思弁哲学」の核心へと取り入れた。自己展開を欠くスピノザの実体にあつては、外面的な機械的な論証の連鎖を通して実体に到らざるを得ないとヘーゲルが捉える時、実体の非人格性を嘆いたヤコービに通じあうものを看取せざるを得ないことに、私たちは驚きを禁じえない。実体の主体化を、主体の実体化が担保する構造のなかで、自らの制約を自己超出しつつ生き延びる「主体」が、思弁に到る認識の展開主体として構想された。そうであるなら

ヘーゲルにとって、実体を主体化することができると考えるに到った要因を、有限なものが自らを超出する契機としての「否定態」に見ることができよう。そしてヘーゲル自身、「否定」の論理も、実は、スピノザからヤコービを経て受け継いだのであった。「(規定性は否定態である)がスピノザ哲学の絶対的な原理である」(GW.XI,376)と認めたにもかかわらず、ヘーゲルの見るところ、「スピノザは規定性としての否定態(Negation als Bestimmtheit)もしくは質としての否定態に留まっている。彼は、絶対的な、すなわち自らを否定する否定態として、否定態を認識するまでには到っていない。であるからして、スピノザの実体は絶対的な形式さえも含んではいず、実体の認識は内在的な認識ではない」

(ibid.)。否定態としての制約されたものが自らを否定するところに、制約からの自己超出が図られることになろう。そこに、ヘーゲルにとって内在的な認識が拓かれる。

またしても、ヤコービの『スピノザ書簡』に目を向けてみると、(規定は否定)に論及している箇所がある。スピノザによる書簡五〇の「規定は否定ですから、形態は私の申したように否定以外の何物でもあり得ないということになります」(『スピノザ往復書簡集』岩波文庫、二三九頁)を引きながら、ヤコービは説明を加える。「従って、個々の事物

は、ただ一定の規定された様態において存在する限り、非—存在者(non-entia)である。そして規定されざる無限な実在は、唯一の真の実在的なものである」(Spi.Br.131;Jacobi,I-1,100)。続けて『知性改善論』からの次の言葉を引くのである。「それは一切の有であり、それを外にはいかなる有も存在しないのである」(『知性改善論』岩波文庫、六三頁)。ヘーゲルによるスピノザ理解の柱は、ほとんどイェーナ時代初期に形成されていて、誤解を招くことを怖れなければ、そのいずれも、ヤコービのスピノザ理解によって深く媒介されたものであったことを、私たちは確認せざるを得ない。それならば、ヘーゲルをして、ヤコービではなく、ヘーゲルたらしめた要因をどこに求めたらいいのであろうか。スピノザの『デカルトの哲学原理』と「マイエル宛て書簡」に掲げられていた、中心が異なった二つの円の図は、ヘーゲルの目には「自己関連」を具現化した象徴として映じたに違いない。しかし、ヤコービにとって無限性は、禍々しいものでしかなかった。無や否定もまたヤコービにとっては呪わしいものであった。見てきたように、ヘーゲルによるスピノザ理解を先導したのがヤコービによるスピノザ把握であったことには間違いない。ところが、ヤコービは、主観的な「心胸」の独断論に留まり、自己関係する否定の論理は、到底、受け入れ難いどころか、想到することさえなかったであろう。両者を分けたものは、自己原因としての無限な実体を、自己関連するものとして受け止めるとともに、(規定は否定)をその自己関係性のうちで捉え返したところにあった。

## ドイツ観念論とスピノザの関係

入江幸男 (大阪大学)

ドイツ観念論に共通する基本的な立場は、全体論(あるいは一元論)という特徴である。この全体論は、(かりにそれが、ヤコービを介するスピノザ受容であったとしても)スピノザの影響によるものといえる。ただし、ドイツ観念論の全体論がスピノザのそれと異なるのは、スピノザの全体論が存在論的であるのに対して、ドイツ観念論の全体論はそれに加えて認識論的および意味論的でもある点である。

スピノザは唯一の実体である神だけが存在すると主張し、その他のものはすべて神の様態や属性であり、それ自体によって存在するのではなくて、他のものによって存在すると考えるので、存在論的な全体論(あるいは一元論)を主張している。しかし、スピノザの全体論は、認識の全体論ではない。

Baruch de Spinoza  
1632-1677

科研基盤研究(B)  
近現代哲学における虚  
軸としてのスピノザ

ユークリッドの公理系と同様に、スピノザは、定義と公理の基礎的な真理性が、証明における推論の妥当性によって、定理の真理性を保証すると考えていた。また意味論に関しても、スピノザは全体論的ではない。スピノザによると神は無限の属性をもち、そのうち延長と思考だけが人間が知ることの出来る属性である。そして、延長する物体には、対応する観念が存在しており、物体の系列と、その観念の系列は対応している。このような観念の系列が思考であると考えられているようだ（参照、上野修『スピノザの世界』講談社現代新書、第4章）。したがって、スピノザにおいて、思考は要素主義的であり、そこから言語の意味についても要素主義的である。

R・ブランドムによればこのような要素主義的な意味論ないし認識論に変化をもたらしたのは、カントである。ブランドムによれば、カントの功績の一つは、概念ではなく判断こそが意味理解の最小単位であると考えた点にある（Cf. R.

Brandom, *Articulating Reason*, Harvard U. P., 2000, p. 125）。カントがこのような考えたのは、直観の多様を統覚によって統一することによってのみ経験が生じるからである。そしてこの「統覚」概念から大きな影響を受けたのが、フィヒテであり、かれに続くシェリング、ヘーゲルであった。ドイツ観念論が、意味や認識にまで全体論を拡張するのは、カント的な観念論の影響である。バークリは観念論を主張していたが、意味や認識に関しては他のイギリス経験論者と同じく原子論的であった。

しかし、カント哲学自身を意味の全体論や認識論的全体論とみなすことはできない。なぜなら、カントもまた、公理系の形式（「数学的方法」）で形而上学を叙述する構想をもっていたからである。ブランドムは、クワインの意味の全体論を念頭に置きながら、そのような意味の全体論を最初に主張したのはヘーゲルであると述べている（R. Brandom, *Teles of the Mighty Dead*, Harvard U. P., 2002, p. 183）。しかし、我々はフィヒテの中にすでに意味の全体論の主張を見ることが出来る。

カントとドイツ観念論の間に私たちが感じる隔たりは、全体論的な性格の有無であり、それはスピノザの影響の有無であると言えるのではないだろうか。フィヒテの場合には、一方では、全体論的な哲学という点でスピノザから決定的な影響を受けているものの、他方では、整合的な哲学体系はスピノザの実在論か自分の観念論しかないという仕方、スピノザを終生最大の論敵としてい

た。その意味で、カントとフィヒテにとって（あるいはそれ以前のドイツ思想史にとっても）スピノザは論敵として想定される虚軸であった。これに対して、シェリングとヘーゲルはスピノザを積極的に受容している。もちろんスピノザへの批判もあるのだが、それは全面的な拒否の態度ではない。彼らのスピノザ受容によって、スピノザは、ドイツ思想史の中に一つの実軸として一定の評価を与えられて登場し始めるのではないだろうか。その評価ないし影響の中でもっとも大きなものは、全体論的（ないし一元論的）存在論だといえるのではないだろうか。

### カントとスピノザ（主義） 総括シンポジウムのためのメモ 加藤泰史（一橋大学）

1：カントがスピノザの著作を直接呼んだ形跡は文献的には確定できない。

2：したがって、カントは当時の一般的なスピノザ理解（それゆえに、それはまたスピノザ主義理解にほかならない）と同じような理解、すなわち、スピノザ主義を「無神論」・「運命論」と理解していた。

3：そうであるとすれば、カントが「自由」を主題的に論じた『実践理性批判』においてスピノザ（主義）を取り上げて批判するのはごく自然であろう。しかも、その背景には「汎神論論争」があることは容易に見て取れる。このとき、ヤコービのスピノザ理解も主に「無神論」・「運命論」としてスピノザを理解して批判していると言える。

4：そうしてみると、やはり『オプス・ポストウム』のカントをどう理解できるかが重要な問題となる。

5：このとき、晩年のカントは初期シェリングを読んでいた可能性も考慮に入れておく必要がある。若きシェリングはすでにスピノザ主義者であった。

6：「超越論的観念論は（...）スピノザ主義である」というとき、この「超越論的観念論」がカント自身の立場を指すのかそうでないのか一つの論点となる。カント自身の立場でなければ、ことは比較的簡単に済むであろう。

7：問題はカント自身の立場を表明している場合である。このとき、『オプス・ポストウム』の主題である「移行（Übergang）」と重ね合わせて考察する必要がある、ここに初期シェリングの自然哲学の持つ重要性があろう。